

よこおる(横)

『風俗』(羣書類従、三五〇、九丁、オ)に、

加比可禰乎佐也爾毛美之加也介々禮難久介々禮難久與古保利太天流佐也乃奈加也末。

とあり。今『同書』の假名遣を検するに、誤なしといひて可なり。ただ「奈見乃字惠」(波の上)、「奈乎」(猶)の二つ、ハ行なるべきがワ行に轉じたり。但しワ行の音を、ハ行に誤れることなければ、此の「與古保利」の假名、また信賴するに足るべきなり。

れんじやく(連着)

『節用集 饅頭屋本』(三三三丁、ウ)に、「連索」<sup>レンジヤク</sup>、『節用集 大槻本』(六四丁、ウ)に、「連索・龍釋具」<sup>ジヤク</sup>商人と

ある外、いまだ實例を見出でず。鞆の連着なりといふ説あれど、連着は、小總・辻總に對して、大總の鞆をいへるにて、『世俗淺深秘抄』(羣書類從、一六輯、一一二九頁)によるに、公卿の料にして最上の鞆なり。その製、普通の鞆に、大總を連ね着けたるものなりとぞ。されば、そのさま、彼の商人の「れんじやく」に似たりとも思はれず。「筭債」「連尺」など書けるも、その意を得難し。

## ろうたし

### 一 ラウタシ

### 平安朝時代

『素性集』

山邊にしたひのくもまゝかりかねのらうたくもあるかすみかはるかも。

(二六丁、ウ)

時代不明

『今昔物語丹鶴叢書本』

近ク寄タル氣ハヒ、外ニ見ヨリハ娥ク勞タシ。(二二、一五丁、オ)

顔ノ嚴ク勞タ氣ナルヲ見ニ、男モイテヤ何カセマシ。(二六、二〇丁、ウ)

形美麗ニシテ、心勞タカリケレハ。(二七、四七丁、ウ)

小中將ヲ勞タキ者ニナム思タリケル。(三一、二一丁、オ)

二 ラウタシ・ラフタシ

鎌倉時代

『平家物語延慶本』

少シ面モヤセテマクユヤニ見ヘサセ給ソ心苦キ。サルニ付テモ、イトラ

ウタクソミヘサセ給ケル。(二本、一七丁、ウ)

打涙クマセ給ケルソラウタキ。(二中、七四丁、オ)

死タル人ナレトモ、ネ入タル人ノヤウニテ、ラウタクソ見ヘ給ケル。(五本、

八九丁、オ)

一九六九  
マクユヤ、  
原本の  
まま。

以上「ラウタシ」ノ例。

御淨衣ノ袖サへ朝露ニシホレニケルモ、イト、<sup>ラフ</sup>良タク。(二中、一一丁、カ)

此の他、『字鏡集寛元本』(セ、八丁、カ)に、「透<sup>ラウ</sup>タシ」とあるも同語なるべし。さて、上に  
擧ぐるところ、すべて「ラウ」の例のみなり。『平家物語』に、「ラフ」の傍訓あれど、「良」の  
尾音の「ウ」なると、本書が、「ウ」「フ」の文字を混用したるとより推せば、實は「ラウ」なる  
こと明らかなり。さて、漢字音の「ラウ」と「ロウ」とを混同せるは、後世のことなるに、  
平安朝の著なる『今昔物語』に、「勞」の字を書し、又『素性集』にも、「らう」とあれば、本語  
の「ロウ」ならざること疑なからん。而して、「ラウ」は、「勞」の音讀なるべし。骨折を  
「勞」といふは、平安朝時代一般に用ゐられたる語なるが、勞の甚しき状態をいふよ  
り、「氣ノ毒」の意を生じ、轉じて、「愛ラシ」の意ともなるべければなり。「臈タシ」にて、「ラ  
フ」の音なりとする説あれども、「上臈し」といふ形容詞の、一方にあるのみならず。  
その意義、上臈しきをいへるにあらざれば、此の説は非なり。且つ「上臈たし」とい  
はば、語をなすべけれど、「臈タシ」といひては通せざるをや。

# ろろうし

まづ、本語の意義を検するに、石川雅望のいへるが如く、明らかに、二様の義あり。御てこまやかにあらねど、らうくしう、さうなどをかしうなりにけり。

(源氏物語、柿の巻、湖月抄本、三二丁、オ)

いとさとして、かたきてうしどもを、たゞ一わたりにならひとりたまふ。大方らうくじうをかしき御こゝろばへを、思ひし事かなふとおぼす。

(同上、紅葉賀の巻、一八丁、ウ)

人のなぞくあはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらうくしかりけるが。(枕草子、春曙抄本、七、二四丁、ウ)

季の御讀經の威儀師、あかげさきて、僧の文どもよみあげたる、いとらうし。 (同上、八、五丁、ウ)

書を読み給ふにも、さとくらうくしく、心がらもいとかしこければ。(落

窪物語、大成本、四、三四頁)

御心ざまいみじうらうくしうををしうけおそろしきまで、煩しうさが  
なうおはして。(榮華物語、詳解本、二、一〇頁)  
等は、「老巧」「老鍊」の意なり。また、

かたちきよらに、らうくしくとしわかきを見給て。(宇都保物語、ただこそ、  
五丁、ウ)

かたちなどようはあらねど、いとらうくしう、もののこゝろやうくし  
り給へり。(源氏物語、檣柱の巻、湖月抄本、二五丁、ウ)

ものくしうけだかきかほの、まみいとはづかしげに、らうくしう、すべ  
てなに事もたらひて、かたちよき人といはんにあかぬ所なし。(同上、宿木  
の巻、三八丁、カ)

夜ふかくうちいでたるこゑの、らうくしうあいぎやうづきたる、いみじ  
うこゝろあくがれせんかたなし。(枕草子、春曙抄本、三、一一丁、ウ)

の類は、「愛ラシ」の意なり。さて、二語ともに、假名の證とすべき實例をば見出でず。  
されど、古抄物がすべて「らうくし」と書せると、「ウ」を伴へるア・オ兩列音の別が、近  
古の末に至るまで、存せりと思はるとより推すに、その「ラウ」なるべきは疑なか

るべし。語原を按ずるにも、前者は「勞々」の意とせる説、誠に言はれたり。「老々」の説もあれど、いかが。『平家物語延慶本』に、

黒キ衣袈裟懸タル僧一人、老々トシテ、法皇御前ニ參テ。(一本、二丁、ウ)  
老々トシテ、腰少シ龜給ヘリ。(一本、五丁、ウ)

『玉塵』に、

老子ヲ、胎内に八十一年ヤトラレタソ。生レヲチテ髮カ白カツタソ。サ  
テ老子ト云タソ。老々トハシタソ。サレトモタ、今ウマレヲチノ子ナ  
リ。(三〇、五八丁、オ)

とありて、「老々」は、年老いたる状態をいふが、本義と思はるればなり。但し、此れは形容詞、彼れは副詞なれば、彼れを以て、此れを律すべきにはあらず。されど、前條にもいへる如く、「勞」といふ語は、平安朝の普通語にして、學問藝術すべての事に、勤勞する意を、汎くいひあらはす語なれば、勞ありて、物事に熟練せる状態を「勞々シ」といはんは、さもあるべしと思はるるなり。

次に、「愛ラシ」の意の「ろうし」は、いかんといふに、前條の「ろうたし」と、その意、殆ど等しければ、その「ろう」に當るべき漢字は、二者必ず同一なるべし。按ずるに、本

語また「勞々シ」にて、骨の折るる状をいふが、轉じて、その人を憐む意となり、愛する義ともなれるならん。石川雅望は、「良々」の義とし、『源氏物語』(初音の卷、湖月抄本、二丁、ウ)に、「少しおとなびたるかぎり、中々よし・く・しく」とあるは、この「良々」を訓にていへるなりといへど、さる語のあるべき筈なし。「よし」は、「由」の義なること、他にも例ありて、明らかかなり。この「愛ラシ」の意の「ろうくし」と、同意の語に、「りようりようし」といふがありて、『枕草子』(春曙抄本、二、一七丁、オ)に、「ことねりは、ちいさくてかみのうるはしきが、すそさはらかに聲おかしうて、かしこまりて、物などいひたるぞりやうくしき、『狭衣』(元和本、二上、一〇丁、オ)に、「心ばへりやうく敷こそおはすれなど、口く」に物語などすれど」などあり。思ふに、こは、「ラウくシ」の轉、「リヤウくシ」にて、後世の稱なるべし。かくて中古の物語等に、「りやうくし」とあるは、後世改めたるものならん。上掲の『枕草子』なるも、古寫本には、「らうくし」とあり。さて、上述の如くば、「勞々シ」は、二様の異りたる意義を有する語となりぬべし。されど、其は、後に別れたるにて、その初は、單に、勤勞の多き状態を表す語なりしならん。

## わかんどうり(王孫)

實例、いまだ見當らず。されど、かの『北史』に、「和歌彌多弗利」とあるは、必ず同語なるべし。「和」の字、「利」とあれど、誤なることと、さして、本語の意義を考ふるに、「わかん」は、明らかかなれば、改めて引きたり。なほ不明なれど、「とうり」は、伴信友の説の如く、『字鏡集寛元本』(六、九丁、ウ)に、「裔<sup>エイ</sup>トホ」とある、「裔」の意なるべければ、其の假名は、「トホリ」なるべし。『北史』に、「多弗利」とあるは、聞きひがめたる言ならん。但し、「弗」は、「ホチ」の音あれば、「フ」にあらずして「ホ」の音標なるべし。

## われもこう(草の名)

『尺素往來羣書類従本』(二〇丁、オ)

『節用集天正本』(上、三一丁、ウ)

『節用集易林本』

(上、三二丁、オ) 『撮壤集増補語林倭訓葉本』(二〇頁)等いづれも「我毛香」と書せり。また、『新撰類聚往來』(上、二五丁、ウ) 『節用集饅頭屋本』(二三丁、オ)には、「予甲」とあり。正しくいへば、前者は、「ワレモカウ」、後者は「ワレモカフ」の音なり。されど、原本には、後者も「ワレモカウ」と訓せり。漢字の音を轉訛せる時代なれば、異むべきにあらず。かく、室町時代の文獻に、すべて「ワレモカウ」とあるのみならず。前篇に掲げたる、『語林類葉』の説にいへる如く、平安朝末期の『久安百首』(羣書類従、一六九上、三一丁、オ・同下、三七丁、ウ)に、「我れも斯う」といひかけたる歌のあれば、これによるべきなり。但し、その「カウ」は、いはゆる音便にして、原音にあらざるやも知るべからざるなり。

疑問假名遣 後篇終